

情報共有 (2枚 非管理用)

東京電力株式会社

NISA班 ← フレス対応 4-U

(加味) 1期不可
10/15 NISA 1期生

暫定版

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時: 平成 23 年 10 月 15 日 (土) 11:00~11:15
場所: 東京電力本館 3階大会議室
先方: 記者約 15 名 (カメラ 3 台)
当方: 原子力・立地本部 []
原子力設備管理部 []
広報部 []

配布資料:

- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (10月15日 6:00 現在)
- ・ 福島第二原子力発電所における緊急安全対策「現場突動」訓練の実施について
- ・ 3月12日および13日の通報連絡文書 (環境影響評価システム)

[]よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑:

- Q. 1号機の建屋カバーについて、今後の竣工に向けてのスケジュールは。
- A. 本日から排気システムの試運転 (組み合わせ試験) を1週間程度行い、加えて屋根に設置するカメラや照明の電源接続、機能確認を実施する。来週後半には竣工できる予定であるが、最終的には原子力安全・保安院の確認を受けることとなる。
- Q. 福島第二原子力発電所における緊急安全対策訓練について、実施後に反省点や課題等があったのか。
- A. 教訓については、まだ発電所にて反省会を実施している最中のため、詳細を把握していないが、こういった訓練を繰り返し実施していくことが重要であると考えている。休祭日や夜間といった対応要員が手薄になる時間帯や、誰にでも作業ができるような手順の標準化等が重要だと考えている。
- Q. 将来的に反省点等をまとめて報告する予定はあるのか。
- A. 発電所として取り纏める予定である。
- Q. 福島第二原子力発電所で実施された訓練の時間が福島第一原子力発電所の訓練に比べ長い理由は。
- A. 福島第一原子力発電所と福島第二原子力発電所では、設備の状況が異なること、および福島第一原子力発電所は厳しい環境であり、訓練とはいえ被ばくするリスクがあることから、ある程度その点を考慮した訓練内容となっている。
福島第一原子力発電所で実施した訓練は、全ての電源を喪失し、注水ポンプが使用できなくなったことを前提としており、消防車の出動から海水を引き込んで原子炉へ注水することに限定しての訓練であった。訓練の時間としては午前中の1時間半程度であった。
一方、福島第二原子力発電所は原子炉建屋やタービン建屋、海水熱交換機建屋が稼働している状況であり、訓練としては再度津波に襲われた際に、電源の確保や原子炉・使用済

燃料プールの冷却など緊急安全対策で定められている事項が確実に実施できるかを訓練したものの。

Q. 午前と午後では実施した訓練内容が異なるのか。

A. 午前中は主に原子炉および使用済燃料プールの注水訓練を実施した。午後は電源車による電源の確保、原子炉・使用済燃料プールの除熱訓練、ガラ撤去の訓練を実施した。

以上

小情報共有

(3727非管理用)

NISA班 ← プラント

北沢

不明

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

暫定版

10/15 9:46

公開性

日時：平成 23 年 10 月 15 日 (土) 18:00~18:50

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 20 名 (カメラ 3 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析結果について (第二百四報)
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における海水中の放射性物質の核種分析結果について (第百九十七報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水に含まれる放射性物質の核種分析の結果について (10 月 14 日採取分)
- ・ 福島第一原子力発電所沖合における海底土の放射性物質の核種分析について (続報 31)
- ・ 福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について (10 月 14 日採取分)
- ・ 茨城県沖における海水中の放射性物質の核種分析の結果について (続報 32)
- ・ 宮城県沖における海水中の放射性物質の核種分析の結果について (続報 7)
- ・ 集中廃棄物処理施設周辺 サブドレン水核種分析結果
- ・ 写真でお示しする福島第一原子力発電所の現状～Jヴィレッジ編～
- ・ 福島第一原子力発電所 注水設備復旧訓練 訓練実施場所
- ・ 福島第一原子力発電所 1 号機原子炉建屋 赤外線カメラによる原子炉直上部の温度測定結果
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

- Q. 今回赤外線カメラにより温度を測定したのは、事故後初めてか。また、今回の映像は瓦礫の上から撮影していると思うが、原子炉の表面の温度は何℃程度か。
- A. 赤外線による測定は初めてである。1号機は天井がそのまま落下しているので、天井越しで撮影しており、3号機とは違い鉄骨などは写っていない。また、シールドブラグというコンクリート製の蓋の切れ目部分の温度が高くなっているが、詳細については分かっていない。3号機については、建屋が落下した際の鉄骨が写っており、低い温度になっている。なお、鉄骨と思われる部分が一部高い温度になっているが、これは日当たりによる影響かと思う。

Q. 原子炉の表面温度が写っている画像は無いという事か。

A. その通り。

Q. 赤外線温度測定の結果において、温度が高くなっているところは水蒸気の影響か。

A. 以前、原子炉建屋からの湯気が目視で確認されており、その影響であると考えている。

Q. J ヴィレッジにあるタイベックの山は、3月11日以降から保管をはじめているのか。

A. その通り。

Q. J ヴィレッジで保管を始めてからどこかへ持ち出していないのか。

A. J ヴィレッジで回収したものは全て保管している。

Q. J ヴィレッジで回収できていないものもあるのか。

A. J ヴィレッジが着替えの拠点であるため、ほとんどが回収でき、保管していると思われる。なお、福島第一および福島第二発電所内にも少し保管している。

Q. タイベック 4,000m³は何人分に相当するのか。

A. 何人分に相当するのか推定することは難しい。これまで原子力発電所の復旧作業に携わった延べ人数は48万人であり、1日1着は使用しているため約48万着はあるのではない。ただし、1日2着使用する場合等もあるため定かではない。

Q. まだ、置く場所に余裕があるかと思うが、今後どのくらい増えるのか。

A. 現時点で今後の具体的な処理、処分方法は決まっていない。当面はJ ヴィレッジで保管していく予定。

Q. 崩れる恐れはないのか。

A. ある程度の高さまで積み上げたら、別の山を造っていく。

Q. 赤外線カメラで撮影した写真について、コンクリートの床面は原子炉建屋の何階か。

A. 5階である。

Q. 蒸気が出ているのは、元々ある隙間からなのか。

A. その通り。原子炉はシールドプラグというコンクリート製の蓋で覆い被さっており、重いため3枚に分かれている。コンクリート製の蓋なので、完全に密封されているわけではなく、雨水が入ったり蒸気が出るような多少の隙間がある。

Q. タイベックを集積しているのは、J ヴィレッジの敷地内の集積所か。

A. その通り。

Q. 集積したタイベックの高さは。

A. 5～6m程度かと思う。

Q. 訓練は、シナリオがあつて決められた作業を行うものか。

A. 今回の訓練はM8クラスの地震が発生し、津波に襲われ、現在使用している注水ポンプやホース類が使用できなくなり、原子炉が冷やせなくなったことを想定して訓練になる。

Q. 誰がどこに行つて何をするか事前に決められた状況で訓練を行っているのか。

A. あらかじめ班体制や役割分担が決められている。

Q. 訓練内で発電所長は「津波の影響が少ない」「サーベイとアクセスには問題がない」と発言しているが、何か判断基準はあるのか。

A. 津波が収まったかどうかについては、判断基準が定まっていると言うよりも、その時々状況により判断するものと考えている。今回の余震や津波の状況を見ると頻繁に津波が押し寄せることはないため、ある程度時間がたった後、所長の判断で作業を開始する。原子炉への注水が停止してから約18時間後に原子炉の温度が約1,200℃まで上昇すると想定しているが、それまでに冷却を再開したいと考えている。そのため、作業時間3時間を考えると15時間以内には注水を再開する必要があるため、非常に厳しい判断になると思われる。

サーベイについては過大な被ばくにならないこと、また、アクセスについては消防ホースの敷設などに支障となるガレキがないかなどが判断材料になる。ガレキの撤去時には発電所内に用意してあるホイールローラーなどの重機を使って、消防車の走行やホース敷設のためにガレキや流されてきたものを排除する。今回、福島第一では重機を使った訓練が行われていないため、今後の訓練の課題と考えている。

Q. 今回の訓練では実際に海水を汲み上げているが、常設の消防車に何か影響を及ぼさないのか。

A. 訓練終了後に淡水を流すなどにより、設備が錆びないよう対応を行う。

Q. 福島第一原子力発電所の訓練に参加したのは何人か。

A. 約40名である。

Q. 1～3号機が全て停止した場合は、約120名が必要という事か。

A. その時点で作業できる全ての人を動員する予定だが、共通の作業もあるので100名前後が必要かと思う。今回の訓練で使用した消防車は2台だが、1～3号機の注水が止まった際には、全部で6台の消防車を使う事になる。

Q. 今後、建物の上部に冷却用のプールを作り、冷却システムが停止した際には、貯めた水を落とすだけという対応の予定は無いのか。

A. 重心が建屋の上部があると設計上好ましく無いので、そのような計画は無い。SFP側は発生する熱量が小さいので、今回のように循環注水冷却が止まった際には数日以内にコンクリートポンプ車により、建屋上部からの注水を考へている。原子炉側は注水系ポンプからの復旧を考へており、ポンプの復旧が間に合わない場合は消防車により注水する。

以上